

## ろばの子に乗って

ヨハネの福音書 12章 12-19節

### はじめに

今日の聖書箇所は、「**その翌日**」という言葉から始まります。「その翌日」とは、どの翌日かということ、ラザロの姉妹であるマリアが、イエス様の足に非常に高価な香油を注いだという出来事の翌日です。この出来事は、「過越の祭りの六日前」の出来事でした。イエス様が十字架で死なれるのは、「過越の祭り」の時でした。ですから、マリアがイエス様の足に香油を注いだのは、イエス様が十字架で死なれる六日前でした。今日の聖書箇所は、「その翌日」ですから、イエス様が十字架で死なれる五日前の出来事です。

### 1. イエスを出迎える群衆

イエス様がエルサレムに来られると聞いた「**大勢の群衆**」は、「**なつめ椰子の枝**」を持って迎えに出て行き、「**ホサナ。祝福あれ、主の御名によって来られる方に。イスラエルの王に。**」と言って叫んだのです。イエス様は、大勢の群衆に熱狂的に歓迎されて、エルサレムにやって来られたのです。

この時のイエス様は、ユダヤ人の最高議会から命を狙われていました。ユダヤ人の最高議会は群衆に、イエスがどこにいるかを知っている者は報告するように、という命令まで出していたのです。しかし今や、そんな命令は完全に無視されて、イエス様は公然と、熱狂的に、大勢の群衆に歓迎されて、エルサレムにやって来たのです。19節で、パリサイ人たちが、「**見てみなさい。何一つうまくいっていない。見なさい。世はこぞってあの人の後について行ってしまった**」と言っている通り、ユダヤ人の最高議会は、群衆を全くコントロールできなくなっているのです。群衆は皆、ユダヤ人の最高議会ではなく、イエス様を支持して、イエス様の後について行くようになっていたのです。

なぜ群衆は、イエス様の後について行くようになり、イエス様を熱狂的に歓迎したのでしょうか。それは、17-18節にあるように、ラザロのよみがえりの奇跡があったからです。イエス様が、死後四日も経ったラザロを、墓の中からよみがえらせたという奇跡を目撃した群衆が、それを多くの人々に証ししたのです。その証しを聞いた大勢の群衆が、イエス様を一目見たいと集まって、イエス様こそ「**イスラエルの王**」にふさわしい方だと熱狂的に歓迎したのです。

群衆は、「なつめ椰子の枝」を持って、イエス様を歓迎しました。「なつめ椰子の枝」を持って歓迎するというのは、王や偉大や英雄を歓迎する時の習慣です。王や偉大な英雄が、戦いに勝利して帰って来た時に、群衆は讃美の歌とともに「なつめ椰子の枝」を持っ

て歓迎するのです。

この時の群衆も、「ホサナ。祝福あれ、主の御名によって来られる方に。イスラエルの王に。」という讃美の歌とともに、「なつめ椰子の枝」を持って、イエス様を歓迎したのです。「ホサナ」というのは、「救ってください」という意味の言葉です。群衆は、イエス様に救いを求めたのです。しかし群衆がイエス様に求めた救いというのは、ローマ帝国の支配からの救いでした。当時ユダヤ人たちは、ローマ帝国に支配されていました。神の民であるユダヤ人にとって、異邦人に支配されることは、耐え難いことでした。そこで群衆は、ラザロをよみがえらせたイエス様に、「イスラエルの王」になってもらいたい、そしてローマ帝国と戦って、ローマ帝国の支配から私たちを救ってもらいたい、そう願って、「ホサナ」「救ってください」と叫んだのです。

## 2. ろばの子に乗られるイエス

では、イエス様は、そのような群衆の熱狂的な歓迎に対して、どのように応えられたのでしょうか。14節を見ると、イエス様は、「**ろばの子を見つけて、それに乗られた**」とあります。群衆は、イエス様を王や偉大な英雄のように歓迎しました。普通、王や偉大な英雄は、華やかな、力強い大きな馬に乗って登場します。しかしイエス様は、弱々しい小さなろばの子に乗って登場されたのです。これは、群衆の期待するような姿ではなかったと思います。しかしイエス様は、あえて群衆の期待を裏切るような姿で登場されたのではないのでしょうか。

イエス様がろばの子に乗って登場するというのは、15節にあるように、旧約聖書のゼカリヤ9：9に預言されていることでした。「**恐れるな、娘シオン。見よ、あなたの王が来られる。ろばの子に乗って**」。ゼカリヤ9：10には、その王がなぜろばの子に乗って来られるのかということが書かれています。「**わたしは戦車をエフライムから、軍馬をエルサレムから絶えさせる。戦いの弓を絶たれる。彼は諸国の民に平和を告げ、その支配は海から海へ、大河から地の果てに至る**」。ろばの子に乗って来られるというのは、武力を放棄するという意味なのです。ゼカリヤ書は、武力によらない平和をもたらす王がやって来ると預言しているのです。

群衆はイエス様に、王や偉大な英雄のように武力によって、ローマ帝国から自分たちを救ってくださることを期待しました。しかしイエス様は、群衆の期待を裏切るように、ろばの子に乗って登場し、「わたしは武力によらない平和をもたらす王である」というメッセージを伝えているのです。

では、イエス様は、どのような平和をもたらす王なのでしょう。それは、神様と私たちとの間における平和をもたらす王であると言えます。イエス様はエルサレムに來られました。何のために來られたのでしょうか。それは、十字架で死なれるためです。私たち人間の罪を背負って、私たちの身代わりに十字架で死なれるためです。私たち人間は誰でも、神様の前に罪人です。神様の御心に従わずに生きて、日々神様の前に罪を重ねてきた罪人です。それゆえに本来、神様の怒りと呪いと刑罰を受けなければならない存在です。

しかしイエス様は、私たちの罪を背負って十字架に架かり、私たちの代わりに神様の怒りと呪いと刑罰を受けてくださったのです。そうして、神様の怒りと呪いと刑罰から、私たちを救ってくださったのです。神様と私たちの間に、平和を与えてくださったのです。すべての罪が赦されて、神様の子どもとして、神様の愛と守りと導きの中で生きようとしてくださったのです。

群衆は、「ホサナ」「救ってください」と叫びました。しかし群衆が願っていた救いは、ローマ帝国の支配からの救いでした。しかしイエス様がもたらす救いは、そのようなものではありませんでした。イエス様がもたらす救いは、ローマ帝国の支配からの救いではなく、神様の怒りと呪いと刑罰からの救いでした。そして、ローマ帝国から解放される平和ではなく、この天地を造られた唯一まことの生ける神様との平和でした。すべての人間に、根源的に必要な救いであり、平和でした。

群衆が願っている救いや平和と、イエス様が与えようとしている救いや平和には、ズレがあったのです。群衆はこの後、このズレに気づき始めてきます。そしてイエス様が、自分たちが願っている救いや平和をもたらす存在ではないと分かったと、「**除け、除け、十字架につけろ**」(ヨハネ 19:15)と叫び始めるのです。群衆とは身勝手な者です。自分の期待に応えてくれる存在は歓迎し、そうでないと分かったと、その存在を簡単に捨てるのです。しかし、これが私たち人間の姿です。

## **おわりに**

私たちは、イエス様に何を期待しますか。何から救ってもらうことを求めていますか？病気の苦しみから救ってほしい、貧しさから救ってほしい、家族の問題から救ってほしい、様々にあるかもしれません。しかしイエス様が私たちを救ってくださるのは、何よりも神様の怒りと呪いと刑罰からです。そしてイエス様が私たちに与えてくださる平和は、私たちと神様との間の平和です。これが私たちにとって何よりも大切な救いであり、平和です。この救いと平和があれば、私たちはどんな病気の中でも、どんな貧しさの中でも、どんな家族の問題の中でも、生きていけるのです。もちろんイエス様は、私たちの病気を治すことも、貧しさから救うことも、家族の問題を解決することもできる全知全能の神様です。しかしイエス様が、私たちに何よりも与えたい救いと平和は、神様の怒りと呪いと刑罰からの救いであり、私たちと神様との間の平和なのです。

16節に、「**これらのことは、初め弟子たちには分からなかった**」とあります。弟子たちも、この時は、イエス様が何からの救い主であり、どのような平和をもたらす方であるのかが分からなかったのです。弟子たちが分かったのは、イエス様が「**栄光を受けられた後**」のことです。つまり、イエス様が十字架で死なれ、三日目に復活され、天に昇られ、聖霊を遣わされるまで、分からなかったのです。

私たちは、ズれていませんか？私たちの願いとイエス様の願いが。私たちの願いとイエス様の願いが一つとなる時、私たちは大きな力と恵みを経験するのです。

天におられる私たちの父なる神様。

あなたは、私たちを愛してくださって御子イエス様をこの世に遣わされました。イエス様は、十字架において、私たちに代わって神様の怒りと呪いと刑罰を受け、私たちと神様の間に平和をもたらしてくださいました。私たちは、あなたの御心よりも自分の願いを求めます。自分の願いが聞かれないとあなたを平気で捨てるような存在です。

どうか、あなたの御心と私たちの願いを一つにしてください。そうして、私たちのうちに御力と恵みを現わしてください。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。